

報酬と消費のヒューリスティックス: 日本人「論」の「行動」経済学 (1)

脇田 成 (首都大学東京)

有斐閣『書齋の窓』掲載

圓生と正蔵の賃上げ論

昭和の落語名人と言われた二人に、六代目三遊亭圓生(1900-1979)と八代目林家正蔵(後に彦六に改名、1895-1982)がいる。圓生は長らく笑点の司会者であった三遊亭圓楽の師匠であり、朝の連続ドラマ『おはなはん』や、山口崇、林隆三らが出演していたNHKドラマ『天下御免』に出演していたと言えば、思い出す人もいるかもしれない。一方の正蔵は、先頃襲名した九代目正蔵(前名はこぶ平でおなじみ)の先代にあたる八代目である。この二人の芸風は正反対であり、メリハリの効いたドラマティックな圓生に対し、正蔵は「八分の力」で淡々と語ってゆくところに特徴がある。面白さという意味では圧倒的に圓生であり、榮譽も圓生に集中した。ただ演目によっては、正蔵の『墨絵』の枯淡の味わいも捨てがたいように思われる。この二人は私生活では仲が悪く、そのためさまざまな点で対立した。1978年にはこの2人の確執が遠因となって、落語協会は分裂しており、圓生の弟子の圓楽とその一門は、現在も落語協会に参加していないほどだ。

さて本稿の主題はもちろん芸風の比較論ではない。この二人のギャラの考え方における対立である。圓生の主張は、自分のようなリーダー的存在が高いギャラを要求するから、落語界全体の底上げが図れるので、堂々と高いギャラを要求すべき、というものであった。一方、長屋住まいで知られ、左翼政党の支持者であった正蔵は高いギャラを嫌い、弟子が法外な金額をもらうと、それを返させるほどであったと言う。

この考え方の対立は芸風を反映しているという意味でも面白いが、実は経済現象としても一般性を持つ。まとめると

- メリハリの効いた芸風の圓生は、一部のセクターの高い賃金がいずれ全体に波及する(いわゆるトリクルダウン) と主張し、
- 平板な語り口の正蔵が、高い賃金が言わば「格差」を生むので、「共生」のため、より低い賃金で我慢する、と主張しているのである。

実は旧来の教科書的な経済学では、この対立は必ずしもうまくポイントを捉えられない。両師匠のギャラ(サービス価格であり賃金)の捉え方には、

[a] まず同業者への波及効果が含まれており、

これは賃金をめぐる古くからの実証研究で重視された効果ではあるものの、理論的基礎は必ずしもはっきりしなかった点である。旧来の経済学では、(交渉理論の威嚇点などの議論はあるものの)観客は自分の(独立した)効用関数に基づいて、入場料を支払うだけであり、それがもとになってギャラが決定されるため同業者への波及効果を基本的には考えない傾向にある。

しかしながらこの効果は

[b] 顧客のヒューリスティックスを考える

ことで、うまく説明できる。心理学でいうヒューリスティックスとは何らかの判断をする場合に、典型的事例を過大に評価しやすい場合をいう。このヒューリスティックスは近年、近代経済学においても盛んに研究されている行動経済学でも重視されるものだ。圓生の高賃金論の戦略は

- 観客の評価の相場を高く上げることによって、典型的事例を高く保つことにあり、

- 正蔵は低く保つことにあるのである。

さらに両師匠の対立からは、少数精鋭が良いのか、多数の共生がよいのか、と言う議論を読み取ることもできる。実際、圓生と正蔵の確執は真打ち(東京落語界の身分の一つ、これになると一人前の落語家と見なされる)昇進問題を巡って、爆発した。真打ちを限定するべきだとする圓生に対し、真打ち昇進を積極的に進めるべきだとする正蔵である。ここから組織の分裂につながってゆく。

マクロのフィードバック

さて落語家のギャラの設定が落語界のためにどう影響するかはさまざまな状況に依存する。なかでも入場料と観客動員数の関係(需要の価格弾力性)に大きく依存するわけである。ところが日本のマクロ経済全体の賃金設定を考えた場合、もう一つのルートを検討しなくてはならない。それは賃上げが消費増大をもたらすルートである。落語家の場合、落語家のギャラが増大して、経済全体の所得が増え(落語見物を含む)消費が増大するというルートは微々たるものなので、それは考えずに分析する(部分均衡)が、マクロではこのルートを含めて(一般均衡)考察しなくてはならない。

この観点からすると、圓生の賃上げ論はタネ火から点火を目指すことにつながるのに対し、正蔵の「共生」論は縮小均衡に留まっている。(正蔵師匠の名誉のために言うとおくと、両師匠の議論が「落語家」という産業内の賃上げに関わった議論であるので、もちろん一概にどちらが正しいとは言えない。)それに対し、日本経済の賃上げ論はマクロの一般均衡を扱っている。そこで大切なのはマクロの議論では、生産から分配へのフィードバックを考察することである。

現在の日本経済は外需主導下にあり、内需が低迷して久しいが、そこで鍵となるのは家計所得、中でも賃金設定の役割である。賃金上昇なくして消費や内需拡大はない、という考え方はようやく浸透してきた。2008年度の春闘では福田前首相が賃上げ要請を行うなど、順調に行けばかなりのところまで回復したに違いないが、この考え方に基づく内需拡大はサブプライム問題から世界的金融危機で腰を折られてしまった。残念ながら日本経済の構造を考えると、現状では外需から内需への波及なくして日本経済の再浮上はないだろう。外需はガスのタネ火であるならば、内需は一面に点火する状況であると言えるから、日本経済はタネ火でお湯を沸かしていた状況と言える。(詳述する余裕はないが2003年からの日本経済のデータにはいくつかの望ましくない特殊な状況があるので、今回の金融危機が「一度死んで、生まれ変わる」契機になるかもしれない。)

賃上げと消費のルート

さて賃上げが消費に結びつくところが、マクロ経済を考える上でのポイントだと述べた。周知のように日本には春闘と呼ばれる集権的な賃金設定メカニズムがあり、それを補完するものとして企業や産業の個別状況に対応するボーナスがある。なぜわざわざこの2種類の賃金に分けられるのか、と言う問題は興味深い。この問題に対し春闘やボーナスはディズニーランドのような二部料金制度に例えられるのではないか、というのが筆者年来の主張である(脇田成(2003)『日本の労働経済システム』東洋経済新報社)。

ディズニーランドは基本料金として均一の入場料をとるが、乗り物やアトラクションは個別の客が好みに応じてそれぞれ支払う。これを春闘とボーナスに当てはめれば、

- 春闘は企業が労働者に支払う「基本料金」であり、
- ボーナスは個別の状況に応じたアトラクションの「従量料金」である

と考えられる。集権的な賃金設定メカニズムは実は欧州各国では珍しくないが、画一的な賃金はインフレや失業をもたらすと言って、評判が悪い。春闘が文句を言われながらも、続いてきたのは、ボーナスと

いう「あそび」の部分で調整の余地があったからだと思われる。

さて賃上げは春闘ではなく、ボーナスで対応すべきだ、と使用者側から主張されることが多い。ボーナスであろうと春闘で定まる定期賃金であろうと、同じ給料、同じ金であり、それならばとかく固定化し面倒な定期賃金ではなく、個別企業の支払い能力に応じたボーナスで調整することが望ましいというのだ。

筆者は以下の2つの理由で、過度にボーナス調整に依存することは望ましくないと考えている。

中小企業とボーナス

まず第一に問題は賃金の波及ルートである。

- 大企業から中小企業にかけて、総報酬に占めるボーナス比率は低下する。

つまり中小企業の従業員のボーナスはもともと少なく、パートや派遣などの非正規雇用者にはボーナスはほとんどない。この状況を前提として、一部の使用者が賃上げはボーナスで対応せよと言うとき、大企業セクターは賃上げしても良いが、中小企業は上げるな、と言っていることに等しくなる。

第二に問題となるのは、消費への波及ルートである。定期賃金でもらった方が消費をするか、ボーナスでもらった方が消費をするか、と言う問題である。実はこの問題には故石川経夫・植田和男両教授による古典的な研究が存在し、行動経済学研究の先駆的地位を占めるものだ。それによれば

- 日本の家計はボーナスを貯蓄に回す比率が高い

というヒューリスティックスが存在し、例えボーナス増加が予期されたものであったりしても、おおざっぱに考えて貯蓄してしまうと言う行動が観察される。

つまりこのヒューリスティックスの存在のもとでは、ボーナスを上げれば貯蓄に回ってしまうが、定期賃金ならば消費に回することを示唆している。果たしてこのようなヒューリスティックスが存在しているかどうかは今後も実証的に検討しなくてはならないだろう。しかし実験や神経と言った繊細なトピックスと考えらるがちな行動経済学であっても、マクロ経済現象の解明にも十分、関係していることをここで強調しておきたい。

本連載は、行動経済学とはなにか、という問題と、旧来から主張されてきた日本論・日本人論との接点を探ろうとするものである。タイトルの「行動」と「論」にカギ括弧がついているのは、筆者の逡巡の表れであって、特にジャーナリスティックな後者を取り上げる場合には大きな注意が必要だろう。しかし日本人論にはどこかに日本経済の制度的社会的特徴が含まれているものであって、それを無視して米国の流行を直輸入するばかりでは、大きな危険を伴うようにも思われる。さらに行動経済学は人々の心理面を重視し、言わば人の心の中に踏み込むゆえに、政策的応用にはより注意が必要でもある。しかしこの両者は硬直化した経済学の解毒剤にもなり得ることも期待されるのであって、本連載では、なるべく具体的な例を引きながら、両者の関係をおいおい考えてゆくこととしたい。

シチュエーションとキャラクター：日本人「論」の「行動」経済学 (2)

脇田 成 (首都大学東京)

有斐閣『書齋の窓』掲載

エヌ氏の有頂天ホテル

多くの人々にとって星新一の名は懐かしいに違いない。10代の頃に熱中し、何冊、何十冊もの文庫本を購入した方も多いのではないだろうか。最相葉月著の『星新一 一〇〇一話をつくった人』(新潮社)は昨年、大きく話題になり、各賞を受賞した本だが、同書によれば星新一自身の人生は波瀾万丈であり、クールな作風に反して、その内面には大きな屈託があったようだ。たしかに、いま読み返してみるとSFと言う『科学空想』的な小説というより、シニカルで東洋的虚無感あふれる作風に驚く。

さて星新一のショート・ショート(超短編小説)の主人公の多くはエヌ氏と素っ気なく記されている。なぜエヌ氏かと言えば、エヌというアルファベットが一番、没個性であるからだ。そう星新一自身がエッセイで説明している。この平凡なエヌ氏がさまざまな事件に遭遇していくのがショート・ショートであり、つまり星新一の作品は没個性の主人公が奇妙なシチュエーションに巻き込まれていく物語であると言える。このようなキャラクターを際立たせない傾向は、戦後の推理小説の世界でもあったようだ。ちょび髭で洒落ものの小男である名探偵ポワロやコカイン中毒のシャーロック・ホームズと異なり、平凡な刑事が活躍する松本清張に代表される推理小説と、流れを一にする戦後の近代的な流れと考えることもできるだろう。

逆にシチュエーションが同一でキャラクターが異なる小説はないだろうか。映画には「グランド・ホテル」形式と呼ばれるものがあり、それが近いのではないだろうか。ホテルや空港など、同一の場所で異なるキャラクター(登場人物)が、異なるストーリーを展開するわけである。昨年ヒットした映画である三谷幸喜監督の『有頂天ホテル』は文字通り、ホテルに集まるさまざまな登場人物のストーリーを同時並行的に展開している。筆者の中学生時には、『ポセイドン・アドベンチャー』や『タワーリング・インフェルノ』など、巨大船や高層ビルが災害に巻き込まれるようなパニック映画というジャンルが流行したが、これは『ジョーズ』などを除いてほとんどがグランド・ホテル形式である。今考えてみると、これはお手軽な映画作製方法であり、大スターを集めてありきたりのストーリーをあてはめることにつながりやすい。そのため現在ではそんなに制作されていないようだ。

代表的な経済主体というキャラクター

経済学のモデル分析で登場する家計や消費者・労働者は、しばらく前までは没個性・非人間的であった。もちろん労働者が有能かそうでないか、資金の借り手が誠実かそうでないかの違いを導入し、2種類の主体を導入することはある、しかしそれは最低限の導入であり、いわゆる人々の個性重視を考えることは少なかったと言えよう。つまり経済学のモデル分析は星新一のショートショートの主人公、エヌ氏を中心に回っていたわけである。

なかでも代表的なモデルは、合成された代表的個人の効用最大化を中心に据える新古典派モデルである。成長モデル等で盛んに使われるこのようなモデル分析の作法は、一人しかいるんだか、たくさんいるんだか分からないし、同じ人間が多数いても取引は起こらないはず、という揶揄がある。しかしマイクロ経済学の基礎中の基礎が教えるように、価格イコール限界効用であるから、異なった選好の持ち主であったとしても市場交換を通じて、限界効用は等しくなっており、そこから代表的個人が導出されるのである。

ミカンとリンゴの限界効用

少々まどろっこしいかもしれないが、この点を具体的に説明してみよう。たとえばミカンに対してリンゴがとて好きなA氏とミカンが好きなB氏がいたとする。ところがA氏はミカンをたくさん保有しており、B氏は逆にリンゴをたくさん保有している。そこで両者が量に余裕のあるミカンとリンゴを交換してゆけば、互いに、よりハッピーとなるというストーリーが、マイクロ経済理論における交換の基本である。(そこで交換を担う市場機能を最大限に生かすことが、規制緩和等の政策提言の背後にある。)

さてA氏はどれほどリンゴが好きであろうと、手持ちのミカンをリンゴに取り換えて消費量を増大してゆくと、リンゴの限界効用は低減してゆき、価格のところで止まる。B氏は逆の動きで、このプロセスはやはり価格のところまで消費することになる。このときももとの効用関数が異なっても、両者とも価格＝限界効用であるから、その限界効用を持つ合成された経済主体が原理的には生成されることになる。逆に市場が欠落(不完備市場)していれば、限界効用は均等化されないので、単一の経済主体は合成されない。

シチュエーションからキャラクターへ

しかし代表的個人が完全競争市場に直面する物語は、考え尽くされてきた。そこでキャラクターは平凡だが、さまざまなシチュエーションのモデルが発展した。なかでも重要なモデルが「非対称情報」である。一方は知っているが、他方は知らないというシチュエーションは、さまざまな「すれちがい」のドラマを生む。しかしながらこのドラマも没個性の二人の対立だけでは、もはや盛り上がらない。そこで登場したのが、生きた人間を彷彿とさせるキャラクター設定を考察する行動経済学であると言える。

行動経済学には人間行動をそのまま自然科学的に研究するという側面があり、今では神経や脳への研究に及んでいる。しかしながらミクロ的に、そして自然科学的に突き詰めるだけでは不十分で、現実に適用するためには、もう一段階必要ではないだろうか。それはさまざまな心理やバイアスをもつ行動経済学で扱う個人と、それを是正する組織や市場のメカニズムやあるいはいわゆる合理的個人との相互作用が問題になってくると思われる。

つまりこれまでの合理的個人がエヌ氏に代表されるのならば、非合理で移ろいやすい行動経済学の扱う個人はエフ氏であり、エヌ氏とエフ氏の相互作用によるドラマが展開される必要があるように思われる。言ってみればエフ氏は漫才で言う「ツッコミ」であり、エヌ氏は「ボケ」である。破天荒な横山やすしの横に真面目くさった西川きよしがついて、漫才は成立するのであり、やすしが2人では漫才にならない。

このようなモデル分析が実はこれまでなかったわけではない。株式など資産市場におけるノイズ・トレーダーモデルと呼ばれるモデルは行動経済学の先駆的なモデルであるが、

- 合理的な参加者と
- ノイズ・トレーダーと呼ばれる付和雷同的な市場参加者の

相互作用を研究し、合理的な参加者がノイズトレーダーの付和雷同を見越して行動する側面をモデル化している。これらモデルの結果は有名なケインズの美人投票に近いものだ。

また、さまざまな「くせ」が個人にあるならば、それをプールすることによって企業や組織、制度が成立する可能性もある。徐々にリターンが上昇することが「損失回避」と呼ばれる行動経済学上の特性と合致するならば、ある種の(不合理とされる)金融商品や年功賃金制は「くせ」を読み込むことによって成立していると言えよう。

繰り返しゲームと行動経済学と集団主義

さて日本人論には、恥の文化や集団主義などさまざまなキーワードがある。なかでも日本人の特性とし

て、「集団主義」と呼ばれるものがある。その厳密な定義は難しいが、日本人が集団に同調しやすい傾向を表していると言って良いだろう。この集団主義を先述のキャラクターか、シチュエーションかどちらで捉えるかによって、その意味合いは大きく変わってくる。

[A] 日本人はその本来の性質が特別特殊であり、集団主義的な性質をもともと本来の性向として持っていると考えるキャラクター論

[B] 日本人は置かれていた状況がいわゆる集団主義に適した環境であった、と考えるシチュエーション論

このような分類は遺伝か、環境か、と言い換えても良いかもしれないし、文化か制度かといってもよいかもしれない。いずれにせよキャラクター論による集団主義を考えると、これは激しい批判を浴びており、現在の実験経済学の結果ではその成立は微妙であるようだ。しかしシチュエーションが集団主義をもたらすと考えると、必ずしも人工的なシチュエーションで行われる「日本人は集団主義的でない」という実験結果と非整合であっても不思議ではない。繰り返しゲームと呼ばれる手法では、経済学では奇妙な効用関数を設定するわけではないのである。結局、集団主義はエヌ氏たちの繰り返しゲームにより捉えられるのであれば、繰り返しゲームが成立しやすいシチュエーションがどのようにもたらされるのか、を研究することが重要なのであって、もともと日本人が集団志向のキャラクターをもっているか、という問とは異なるものである。

持って生まれた性向が異なっているわけでもなくとも、与えられた環境により行動が変化すること、そして持って生まれた性向を是正するために制度や文化が発展することは十分にありうる。筆者が違和感を持つのが、生物学的に日本人が特殊ではない、という傾向を示したいあまりに、そこで議論が止まってしまう、本来の日本経済をそのまま考えることがなおざりにされているのではないか、ということである。日本社会の特徴はこれでよいのか、という問いを、もう一度問うことなく、特殊でないといっても何の理解にもつながらないように思うのだが、どうであろうか。

経済学のポスト・モダン

さてシチュエーションが多様化し、その後行動経済学等の発展に伴いキャラクターが多様化した経済学のモデル分析は、どのようになって行くのだろうか。筆者の専門は労働市場を中心にマクロ経済現象を考察することだが、労働市場を中心にキャラクターを多様化して考えることは必要だが、マクロ経済という意味では、そんなに複雑化されてもうまく理解できないように思っている。

つまり労働経済学者としての自分は、さまざまな現象を行動経済学等を使って、より広い視野で考え直すことが必要と考えている。しかしマクロ経済学者としての自分は既存のマクロモデルはいずれにせよ複雑すぎるので、そんなに複雑にしなくても良い、と思う。エヌ氏のマクロ経済学が《モダン》ならば、行動経済学は《ポスト・モダン》ということになるのかもしれない。しかしポスト・モダンがなんのことか、もう一つよく飲み込めない私には、行動経済学の発展が経済学のモデル分析をぐちゃぐちゃに拡散してゆく契機になるのではないか、という気がしないでもないのである。

経済学者と法学者はなぜ折り合えないのか: 日本人「論」の「行動」経済学 (3)

脇田 成 (首都大学東京)

有斐閣『書齋の窓』掲載

インドカレーと食べる順番

東銀座歌舞伎座近くのナイル・レストランはカレーの名店である。名物のムルギリランチは、カレーライスと骨付き鳥モモとジャガイモのサラダが一皿に盛られたものだ。そこに行くとインド人の名物おじさんボーイ長(?)がいて、鳥モモの骨を取ってくれるが、その際、カレーは混ぜて、混ぜて、とうるさく言われる。カレーもライスも鳥もジャガイモも混ぜれば混ぜるほどおいしくなるそうだ。本場インドのように手で食べるまでは言わないので、私は三分の一ぐらい混ぜて食べるが、彼は全部をぐちゃぐちゃにして食べて欲しそう。実際、インド人は何でも混ぜて食べるのが好きなのだが、これなら何から食べるのか迷う必要はない。

一方、フランス料理や料亭など、高級レストランでは一皿ずつ持ってくる。客はどこから食べるか迷う必要がないが、料理人はどういう順番で出すか迷うに違いない。このように食べる順番が決まっているのか、全部を混ぜてしまうので順番がつけられないのか、全然異なる状況だ。本稿の題名はなんだかこのところ粗製濫造されている新書の題名のようになってしまったが、本稿の目的は経済学者はインドカレーであり、法学者はフランス料理だ、と見立てることにある。

法学と経済学

法と経済学は重要な一分野として定着してきたようだ。そのなかでさまざまな真摯な試みが行われていることは疑いもないが、門外漢にとってはなかなかその真価を知ることは難しい。むしろ激しいが表面的な論争に眼をむけてしまいがちであることは否めない。極めてデフォルメして言えば、

- 経済学者は法律など面倒なものは最小限にしろ、と言っているようだし、
- 法学者や弁護士はこれまでの秩序を破壊する無責任な意見と言っているようである。

このようなまとめ方は、ジャーナリスティックな意見の応酬にばかり眼を向けているためかもしれないが、なかなか両者が折り合うのは難しいようだ。

一般に法学者は基本的人権など、権利を軸に議論が組み立てられるように思われる。そしてどの権利がどの権利に優越するのか、順番を決定するのに忙しいようだ。カレーライスで言えば、カレーだけでは辛すぎてそれだけでは食べることができないので、ライスが主食として優越することになるのではないだろうか。一方、経済学者は順番にあまりこだわらない。カレーもライスも両方がある、始めてカレーライスとしておいしく食べることができる、と考えている。

一方から言えば、混ぜてしまえば皆同じ、というおおざっぱだが、明快な結論を得るのに対し、もう一方から言えばどの権利が重要か、順番が大切になることになる。これをリングとミカンの効用最大化問題で考えてみると、リングを食べる権利もミカンを食べる権利も予算と価格に応じて、満遍なく行使するのが経済学のソリューションであり、無理にどちらの権利が優越するのかを考えることはない。これが経済学の基本的な考え方が、法学はミカンを先に食べるべきか、リングを先に食べるべきか、あるいはミカンとリングはどちらが基本的食物であるかを考えていることになる。

もちろん抽象的な概念である〇〇権や〇〇主義と単なる消費財は同一視できない場合もあるだろうが、多くの場合、〇〇権の限界効用は逡減するのではないだろうか。

水とダイヤモンド

もともと経済学にはアダム・スミス以来の水とダイヤモンドのパラドックスとして知られる問題がある。水は生存に不可欠な重要な財であるのに対し、生存に不可欠でないダイヤモンドの値段はなぜ高価なのか、と言う問題だ。このパラドックスは希少性と限界効用の概念の導入により解決されたが、今なお、このパラドックスと同様の食糧自給率などの問題が取り上げられることが多い。なお新古典派経済学者として著名なロバート・バルローのエッセイ集は“Nothing is sacred.” (神聖なものはない)と題されており、いくら貴重なものであっても消費量が増えれば神聖にならない、という事情をストレートに表している。

ストーン=ギアリー型と損失回避

以上のように考えると、法律はマイクロ経済学で最初に扱わないと宣言される辞書型選好順序(ゲーム理論では扱われることがある)と近似して考察することもできよう。一方、経済学でも、きれいな「順番」ではないが、何が基本的で、どの権利がより優越するのかを、考えないわけではない。消費者需要の実証分析で著名な効用関数形として、ストーン=ギアリー型と呼ばれるものがある。 x 財と y 財の2財がある場合、通常使われる型はコブ=ダグラス型 $x^a y^{1-a}$ と呼ばれるものだが、ここで x 財に最低消費量 \bar{x} があると考えて、 $(x-\bar{x})^a y^{1-a}$ の型に変更するものだ。

この型では最低消費量は必ず消費し、残りを効用関数に基づいて配分することになる。つまり \bar{x} 以下の所得しかないなら、所得は x にすべて向けられるため、消費にはある種の「順番」が形成されることになる。一方、ある程度裕福になると最低消費量を超えてしまうので、順番をつける必要がなくなってくる。

この関数形を使うと、多くの問題が一時近似的に整理されるように思う。実際、法と経済学では「順番」と「どこで線を引くか」と言う問題、つまり最低消費量を巡る問題が多いように思われる。たとえば

- 破産と債務者の順位
- どこからホワイトカラー・エグゼンプションをみとめるか

などである。結局、カレーは辛すぎて、ライスと混ぜないと食べることは出来ないが、ライスの量がある程度あれば、後の比率はそんなに気にしなくても良いという状況になるだろうか。

最低消費量の決定と人権

さて最低消費量はどのように決定されるのだろうか。もともとのストーン=ギアリー型効用関数は実証分析のフィットを良くするために導入されたものであるので、解答はデータで計測するということになる。しかし本稿の一つの主題である行動経済学を援用して考えると、非常に主観的な状況に左右されるのではないだろうか。つまり行動経済学では主観的な参照点という概念が重視され、現状維持のポイントが重要であるとされる。現状のポイントより消費量が減少すると、主観的な効用損失が大きいと言うことを表している。つまり毎日リンゴを2個食べる消費者にとって、1個増加するより、1個減少する方が効用の変化分の絶対値が大きいことを意味し、この現象を「損失回避」と呼ぶ。最低消費量と現状のポイントはもちろん多くの人々にとって同一ではないが、限度ぎりぎりの人にとっては問題は同じであり、これがさまざまな基本的人権問題を生む。

損失回避と法学と経済学

そして、この損失回避を使って、経済学と法学の対立点を考察すると、

- 所得が上昇している場合には、参照点は低く抑えられるので、経済学的解決が有効だが
- 所得が下落している場合には、参照点は高く、人権問題が生じてくる。

つまり自由放任で市場が解決するのか、順番を決める必要が叫ばれるかは経済の成長性に依存するし、刻々と変わっていくわけである。

この点から小泉政権時の規制緩和を考えてみよう。もともと当時、唱えられた議論は

- 規制緩和で経済成長が生じれば、既存の規制がより問題でなくなる、という希望的観測であったが
- 実際に起こったことは、経済成長は家計の所得増大をほとんどもたらさず、より非正規雇用の問題が顕在化した

結果に終わった。つまり参照点以下の階層に属する労働者が増加し、不満が爆発したのである。

以上のように考えると成長するセクターでは経済学的解決、停滞するセクターでは法学的解決が社会的コンフリクトを回避するためには適当であろう。日本経済は言うまでもなく、少子高齢化の影響下にある。マクロの成長率や一人あたりの成長率はある程度は上昇するだろうが、日本経済の内部では、内需部門を中心として縮小均衡が迫られるセクターは少なくないだろう。(たとえば教育業界であり、大学院重点化など、もはや大混乱であって、パイが増大して問題が拡散される望みはほとんどないだろう。)

基本的人権とプライバシーのジレンマ

そこでどのあたりを参照点として設定するのか、と言う問題の解決法は、現実的には個人情報データをどうやって得るか、という点に依存する。巨額の資産を持っているのに、収入が少ないからといって、生活保護を乱発するわけにはいかない。一方、保護の必要な難病なのに、病気を隠されているには有効な保護や対策は打てない。実際、話を複雑にするのはプライバシーの問題である。基本的人権を守るためには、プライバシーが障害になりうると言う問題は多くの専門家に考えて欲しい点である。

情報の非対称性をなくすため、ある程度ガラス張りにできれば、問題は自ずと解決するはずである。それを妨げるのは一つは政府官庁の隠微体質である。権力裁量を行使するためには基準ははっきりしない方が、拡大解釈するためにはあいまいな方がよいということになる。労働問題の場合では、使用者側も権利の拡大には積極的ではないので、基準はあいまいなまま切り下げられることになる。

また、よく有識者や専門家という人が出てくるが、有識者は俺にまかせろ、と言うばかりで、客観的なデータに基づき自動的に判定するのは嫌いなようだ。しかしそれでは社会福祉で時折、見られるばらまき体質を脱することは難しいだろう。

紅茶とミルク

さて英国では、ミルクティーを容れる場合、ミルクを先に入れるべきか、紅茶を先に入れるべきか、長年の議論となってきた。イギリス王立化学会の「完璧な紅茶の淹れ方」によれば、「冷たいミルクを紅茶よりも先に入れる」のが科学的に正しいそうである。その理由は熱い紅茶のなかにミルクを入れるとタンパク質が変質してしまうからだそうだ。つまりタンパク質には不可逆性があり、この性質は本稿で考察した問題点と共通点を持つ。基本的人権や参照点以下の生活が長年の不況により続けば、人々の心も体も熱い紅茶の中のミルクのように変質してしまう。ナイルのおじさんには悪いが、混ぜれば同じという、インドカレー的解決法では今後もコンフリクトは避けられない。

堂島米市場の崩壊と金融危機: 日本人「論」の「行動」経済学 (4)

脇田 成 (首都大学東京)

有斐閣『書齋の窓』掲載

世界最古の整備された先物市場が近世大坂に存在したことはよく知られている。当時の日本においては、大坂が年貢米の集散地として、「天下の台所」と称されていた。そこでは堂島において米の先物市場が存在し、継続的に取引が行われていた。この堂島の米先物市場は幕末期に崩壊し、明治 4 年に通常の商品取引市場として再出発している。ただこの時期は幕末の混乱期であり、なぜ先物市場が崩壊していったのか、詳しいことは分からない。そこで近年の金融危機とこの堂島米市場の崩壊を重ね合わせて、

- 政府が市場の力を恐れて弾圧したという意見や、
- 投機による自壊や金融技術(工学)の発展の無力さの例証

という見解も見られる。筆者は決して歴史家ではないが、以前にこの堂島米市場について若干の計量分析を試みたことがある。そこで今回は筆者なりのラフな分析を、近年の金融危機にからめて述べることにしたい。

順張りか逆張りか: 堂島市場の行動ファイナンス

投機(戦略)の形態にはさまざまなものが考えられるだろうが、大きく分けるならば 2 つである。

- 「順張り」(トレンドフォロー)つまり相場の流れに沿って、値段が上がっているなら購入し、下がっているならば売れとするもの
- 「逆張り」(コントラリアン)つまり相場の流れに逆らう方法

経済学的に言えば、ケインズの「美人投票」的見解は順張りに近く、ミルトン・フリードマンが説明した投機の価格安定化機能は逆張りの結果である。本屋にあふれかえっている投資戦略指南書を見ると、FX などでは初心者は「順張り」、つまり相場の流れに沿え、と解説しているものが多い。流れに逆らう「逆張り」は頭がよく見え、うまく当たれば大儲けだが、実際には損をすることが多く危険である、と指摘している。

さて堂島米市場においては、どのように投機が行われていたのだろうか。狂歌風の相場格言が存在し、これがなかなか面白い。

野も山も 皆いちめん 弱気なら あほうになって 米を買うべし

など、逆張り戦略を薦めるものが多い。また

百年に 九十九年の 高安は 三割超えぬ ものと知るべし

など、価格の定常性を示唆している。(住ノ江佐一郎・日本テクニカル・アナリスト協会『日本野線史』日本経済新聞社。)

堂島米市場の相場格言狂歌には、逆張り戦略が多いのは、実は理由がある。実は堂島米市場は年に 3 回(3 月、9 月、12 月)しか満期となる期限(限月)がなく、その限月を超えた先物はない。つまり季節ごとに市場(春市場・夏市場・冬市場)がブツ切れに分かれ、その最終日に満期をむかえる先物のみが存在するのである。この理由は米の特性を考えればよく分かる。米が収穫できるのは秋の 9 月だけであり、その豊凶が市場参加者の最大の関心事になるからである。3 月、12 月は正月をはさんで米の在庫の取引と、春になって海運が盛んになる事情を反映しているのだろう。

3 種類の資金の流れ

筆者はこの堂島米市場はかなりの程度、優れたパフォーマンスを発揮したと考えてきた。にもかかわらず、幕末期にこの堂島米市場の崩壊した理由は何であろうか。ここではマクロモデルの基本的作成手順を使って、金融市場を構成する以下の三種類の資金の流れを整理してみよう。

[1] 基本的な資金の流れ

まずマクロ経済学では家計の貯蓄を使って、企業が投資を行うという資金の流れを基本に考える。家計の貯蓄を借りて使う借金証文として、企業は社債や株式を発行する。このような資金フローを堂島米市場について考えてみると、基本は言うまでもなく、石高制、つまり米を賃金や税の単位とする制度一、のものと実物としての米の流れである。各大名は地方の領国で年貢米により収入を得るが、都市などで生産される消費財と交換するために、その年貢米を売却する場が大坂の堂島米市場なのである。

[2] 政府導入による金融政策

さて次にマクロモデルに導入する要素は政府・中銀の金融政策と貨幣である。堂島米市場に即して考えると、幕末期には激しいインフレーションが生じたことに注意しなくてはならない。これは度重なる貨幣改鋳と、金銀比価の相違による正貨流出から生じた事態であり、幕末の混乱を加速した要因として知られている。

[3] 金融仲介技術の発展

三番目に導入するのは金融仲介技術である。マクロモデルでも基本モデルに銀行導入による貨幣供給の複雑化が考察されたり、さまざまな金融工学の技術の発展が検討される。堂島米市場など先物市場の発展はこのカテゴリーに入り、先に述べた大名金融の派生として先物市場等が発展したと言える。

[1]がシンプルな実物の貸し借りならば、[2]は貨幣の導入、そして[3]は金融市場におけるリスクヘッジ要因のための、言わば『又借り・又貸し』が洗練されたものと言えるだろう。近年の金融危機が複雑な状況である理由は、この3種類の資金の流れにそれぞれ問題(グローバルインバランス・超低金利政策・金融工学の暴走)が存在し、これら間の因果関係が複雑であるからで、多くの議論も未整理だからである。

崩壊の3側面

さて堂島米市場崩壊の理由を[3]の金融仲介技術から、一つずつ考えてみよう。まず投機が行き過ぎて幕府が禁止したり、市場機能が不全に陥ったりという現象はないわけではないが、これらは幕末期にかけて実は減少していると見られる。幕末期にかけて、年貢米の集散地としての大坂の地位は低下しており、もともと投機が盛んに、過激になっていたわけではないのである。幕末にかけての時期においては、市場参加者の確保のために、最低取引量を引き下げるなど、むしろ市場振興策を取っているのである。

次に[2]の金融政策的側面はどうであろうか。貨幣改鋳が幕末期に大きな混乱をもたらしたことは事実であるが、それよりも確実に大きな問題となるのは商品貨幣とも言うべき石高制の特性である。実は堂島米市場においては現代の直物に当たる『正米』は蔵屋敷(大名の米倉庫)が発行する米切手の交換レートであり、米切手の裏付けは蔵屋敷に保管される米であった。しかしこの米切手は米の在庫を超えて過剰に発行され、蔵屋敷内に存在する米の量と次第に関係がなくなっていく。

この現象には2つの解釈が可能である。第一は大名蔵屋敷による米切手乱発のモラルハザードが生じたと見る解釈である。この見方は商品としての米に着目している。一方、第二は貨幣としての米である。

言わば金本位制が部分準備、そして管理通貨制度に移行したように、手形としての貨幣が米の量と離れて、信用として流通したという解釈もありうるだろう。

最後に[1]の実物的な側面である。石高制は言うまでもなく明治維新により崩壊した。これは大名が年貢米を売ったり、それを担保に前借りをすることがなくなったことを意味する。近年の米国の金融技術の発展と失敗が、米国消費者の「前借り体質」というべき過剰消費体質に帰因することも指摘されており、[1]の派生としての[3]の問題に戻っていくのである。

価格指標と崩壊

さて堂島米市場のパフォーマンスを価格指標でみてみよう。江戸中期においては夏市場(4月～9月)の価格が平均的に低く、春(1月～3月)・冬市場(10月～12月)は高いので、季節的にはU字型パターンが認められる。その理由は簡単であり、9月には米が収穫され、それに先立つ夏市場では先物取引が利用可能なので、実際の在庫量は少なくとも、春・冬市場より価格は安く、直物も先物を反映して安いのである。ここに米価安定の市場機能があるわけである。

ところが幕末混乱期にはこのパターンに変容が見られる。データをみると、

[a] 直物データはU字型は認められないが

[b] 先物データは依然としてU字型は認められ、夏市場の価格は低い。

つまり先物市場は商品先物市場の特性を依然として保っているといえる。すでに戦後すぐ島本得一氏が指摘するように

『米切手が証券であり、従ってその発行量の過大、蔵屋敷の買戻、米の不渡等の如き証券的原因による正米切手相場、従って米価の変動に対して、これを規制し、大局からみて、よく米価の公正を維持せしめたのは、帳合米取引であった。』(「徳川時代の証券市場の研究」1953 産業経済社)』

と解釈するのが適当である。

つまり先物は民間経済主体が主導下にあることによって、その市場機能は混乱期も良く保たれたが、直物は大名蔵屋敷のモラルハザード等により現物米価格との連動は薄れたということになる。市場や保険機能を駆使した金融技術がかえってモラルハザードを促進するという点は、なかなか気付かれにくい点であるが、身分制の隔壁のためか、堂島の先物市場においてはあてはまらないのである。

結局、堂島米市場崩壊の理由はどうまとめられるだろうか。

[3] 先物市場に代表される金融仲介技術はそれ自体としては良く機能しており、

[2] 貨幣改鋳や米切手過剰発行など金融政策・信用はバブル気味ではあるものの、先物市場には波及せず、崩壊の理由としては

[1] 江戸時代の封建体制崩壊、つまり年貢米を大坂で売却する必要がなくなったため、

とまとめられよう。根本的な理由としては、実物の米を担保とする金融の需要が衰退したことが、金融立国崩壊ともいうべき大坂の堂島米先物市場消滅の理由だろう。

堂島からの教訓

さて堂島米市場の興廃から、現在の金融危機に得られる教訓は何だろうか。

[1'] 実物的な側面から考えると、グローバル・インバランスの原因は人口問題にあり、人口が依然として増加している米国と高齢化しつつあるのアジア・ヨーロッパ等の根本的なトレンドが大きく変化することは考えにくい。そこで量的に減少するにせよ、資金フローの方向や米国覇権はさほど変わらないのではないかと依然として考えられるであろう。

- [2] 江戸期においては、金融政策の混乱は補助的な役割しか果たしておらず、現在においてもマクロ政策より規制のあり方が重要ではないか。
- [3] 金融工学・仲介技術の過度の発展が複雑性を増し、市場参加者は対処能力を失ってしまっていると、よく指摘される。しかし堂島米市場のように極めて単純な構造を持ち、金融機関同士の又借り・又貸しや、代理人関係もない状況では、価格は安定化されていることを強調しておきたい。近年の金融危機後、複雑化した金融商品の単純化が必要と指摘されており、また行動経済学的知見も複雑化の危険性を指摘しているが、その指摘は堂島米市場の経験から考えても納得のいくものだ。

ご近所からか、世界からか: 日本人「論」の「行動」経済学 (5)

脇田 成 (首都大学東京)

有斐閣『書齋の窓』掲載

幸四郎と吉右衛門

松本幸四郎と中村吉右衛門は歌舞伎役者で、名字屋号は違うが実の兄弟である。共に当代の名優と言って良く、容貌もたいへんよく似ている。ところが舞台の肌合いは異なる。幸四郎が新歌舞伎と言われる明治以降の作品にマッチするのに対し、吉右衛門は古典歌舞伎(時代物)の第一人者ともはや言って良からう。

両者が主演した TV シリーズや舞台でもその違いは明らかだ。吉右衛門の当たり役は鬼平犯科帳の鬼平であり、江戸幕府の中間管理職、火付盗賊改方である。鬼平は市井に生きる人々の哀歎に敏感であり、清濁併せのむ解決をする。一方、幸四郎は舞台のミュージカル『ラ・マンチャの男』でのドン・キホーテ役や、『王様のレストラン』での伝説のギャルソン千石など、理想に向かって突き進む人物を得意とする。鬼平は料理の好みにうるさいが、千石はレストランのあるべき姿にうるさい。

幸四郎が古典歌舞伎に出演するとき、なにか一人で突っ走って行くような、その近代性が邪魔をするような気がする。そこで幸四郎は古典でも独走するような役、籠釣瓶の佐野次郎左衛門や、佐倉義民伝の宗吾などはあまり役である。幸四郎の次女の松たか子がスクエアな雰囲気の登場人物を得意とするところから想像できるだろうか。

一方、吉右衛門が得意とする時代物の歌舞伎の主人公は、忠孝に引き裂かれた人物が多い。ドン・キホーテが「世のため」ならば、忠孝とは回りの「人のため」に苦勞することであり、言わばこの兄弟は「自立した個人」と「忠孝」をそれぞれ得意とするのである。

恥の文化と罪の文化

「自立した個人」という概念は戦後思想・論壇の鍵概念である。戦後すぐ米国の文化人類学者ルース・ベネディクトが『菊と刀』で日本社会を「恥の文化」と規定したことはよく知られている。日本人は他人の目は気にするが、内なる良心がない、とまで言われれば、さすがに不愉快に思うが、他人志向の傾向が強いと言われれば、それはそれで当たっている点も多いのではないか。この他人志向や「人のため」と言う点は、言わば儒教精神のエッセンスであり、「八犬伝」でお馴染みの仁義礼智忠信孝悌という言葉を出される方も多いだろう。なかでも忠孝は、歌舞伎のストーリーの主軸になるものと言っても過言ではない。歌舞伎イヤホンガイドでもおなじみの小山観翁氏が、歌舞伎では題名に義経とついていても義経は主役ではない、義経に尽くす人が主役となる、と指摘するとおりである。

そこで思い出すのが丸山眞男の『日本の思想』(岩波新書)の一節である。丸山は、儒教の五倫(君臣・夫婦・父子・兄弟・朋友)にはまわりの人々への道徳があるばかりで、他人と他人の関係のような普遍的な感覚がないと批判している。つまり「世のため、人のため」に善行を行うとすれば、儒教精神は回りの人のため、という段階に留まっていることが問題だ、と非難し、自立した個人の重要性を説いたのである。(もちろん儒教には君子論のような為政者論があり、それはもう一つの大きな柱である。)近年、この論点を「(普遍的な)信頼」と「(共同体内の)安心」という枠組みで実験により再検討したのが、社会心理学者の山岸俊男であり、その内容は行動経済学や実験経済学と大きな共通点を持つ。山岸自身も著書『心でっかちな日本人』(日本経済新聞社)において、自らの作業は進歩的文化人の言動を考え直してきたかのようだ、と述べている。

さて自立を追い求めるあまり、共同体嫌悪という知識人は数多く見られる。NHK に『ご近所の底力』という番組があり、さまざまな地域の諸問題を、近所の人たちが集まって解決しようという番組であるが、浅田彰氏は最低の番組と評しており、浅田氏ならそう言うだろうなあ、と思ってしまう。ただこのような「普遍」性を突き詰めると、米国の経済学者や日本の派遣業者にしばしば見られる考え方のように、国内の貧しい人々よりも、世界の中の貧しい人々が問題であり、そこから身近な所得再分配に反対し不平等を容認することにつながって、悩ましいところである。

共同体嫌悪の知識人が多いのは、言わば共同体の相互扶助、保険機能を必要とせず、むしろ他人を助けるばかりで保険料が「持ち出し」になってしまう立場のエリートであるから、とも言える。しかし低開発国ではグラミン銀行のような共同体規制を活用した、取り組みが経済発展に有効であり、また理論的にも顔見知りの間では相互扶助の経済的インセンティブが強いことは十分考えられることである。そういった意味で共同体的な特質を一概に否定することは望ましくないが、無闇に連帯が生じて、責任を問われても困るのも事実である。そこで、どう場合分けするかを考えてみたい。

巡回型ヒーローと共同体

先年、小泉改革にフリーターなど若者たちが熱狂したことは、謎とされてきた。しかし日本社会における個人と共同体の関係を考えれば、この熱狂は理解できる。日本のさまざまな地域、企業、組織には人間関係を軸とした相互扶助組織をもとにした『共同体』が成立している。悪い例を具体的に言えば、大分の教育委員会のコネ採用やいろいろであったり、ゼネコンを中心とした構造であったり、を想像してもらえばよい。(筆者はこの点から地方分権に慎重であるべきであり、現在の論調は行き過ぎと考えている。) これらの共同体は内部ではありがたみが分からず息苦しいと言われるが、そこからはじかれた人にとっては羨望的であったり、怨嗟の標的であったりする。そして言うまでもなく、フリーターなどは共同体の外に位置しているわけである。

このような共同体を懲らしめるヒーローは常に待ち望まれている。それは江戸期の講談であれば、水戸黄門であったり、一昔前のテレビの木枯らし紋次郎のような股旅者であったりするわけである。ただ若者が反逆してゆくというパターンも存在する。それは言うまでもなく夏目漱石の『坊っちゃん』である。四国の田舎町に赤シャツ教頭や野だいこなど、地域有力者と結んだ集団が存在するが、これに鉄拳を見舞うのがよく知られた坊っちゃんのストーリーだ。これらをここで「巡回型ヒーロー」と呼ぼう。

「坊っちゃん」と小泉改革

この『坊っちゃん』が『青い山脈』を経て、『飛び出せ青春』などの青春学園ドラマに受け継がれてゆくわけだが、(森田健作が千葉県知事になるなんて全く念頭になかったので)その話をまたの機会に譲るとして、小泉改革に話を戻そう。共同体から弾かれた若者たちは、『聖域なき構造改革』を唱える小泉首相に熱狂した。それは結局、小泉首相が郵政民営化など既存の共同体の解体を目指す「坊っちゃん」として振る舞ったからである。このキャラクター設定は首相就任以前からあるもので、1997年発行のエッセイ集のタイトル『小泉純一郎の暴論・青論—政界のイチローが語る、痛快本音エッセイ』(集英社)にも、『青論』というところに表れており、わずか10年前の小泉元首相は青春スターを気取っていたことが分かる。

〇〇黄門と自称する政治家は多いが、小泉氏や大阪府の某知事のような坊っちゃん型は多くはない。坊っちゃんはいせいで鉄拳を見舞うぐらいしかできないし、権力闘争に負けて東京に舞い戻りしかできないからである。事実、後継者も坊っちゃん型が続いた自民党は、政権政党から滑り落ちようとしている。

我々は皆、越後屋だ!

もともと巡回型ヒーローは長く居座られると困る。「天才たけしの元気が出るテレビ」の幸福配達人、原田大二郎のように『君たちはもう大丈夫だ』と言って、すぐ去っていかなくてはならない。うっかり八兵衛が茶屋にいつまでも居座って、団子を強要するようなことがあってはならないのである。

なんだか悪いやつらが集まっている共同体がある。我々は憎しみを覚えると同時に、うらやましさを押さえることが出来ない。結局、我々は悪代官となって「越後屋、お主も悪よのお」と言ってみたいのではないか。経済学には私たちは皆ケインジアンだ、とか私たちは皆マネタリストだ、といういい方があり、それは学会のコンセンサスを表すが、その伝で言えば、我々は皆、越後屋なのである。

族の呪縛

格差社会についても、「ヒルズ族」というネーミングがよくなかった。ジニ係数を細かく測定すれば、年代別にほぼ一定という結果はよく知られてきたもので、それは分布のバラツキが一定であることを示している(たとえば平成20年度厚生労働白書を参照)。リッチ層の出現と言っても、ホリエモン氏が女子アナを集めて鍋パーティーをやったぐらいで、実は大挙して、出現したわけではない。そこで本当の問題は分布全体が左下方にシフトし、平均が低下した結果、困窮層が拡大したことにあるのだが、格差社会とヒルズ族と言うネーミングで世論は盛り上がりってしまったのである。実際、当時は「堀江式英単語学習帳『ホリタン』」であるとか、ホリエモンの薦めるレストランガイド『ホリエモンの想定外のうまい店』であるとかが出版され、まあ悪のりもいいところである。(『ホリタン』には興味はないが、『想定外のうまい店』はなかなか良いネーミングではあります。)

いずれにせよ「族」というネーミングには、日本では悪いイメージが付きまとう。族議員、暴走族、タケノコ族(古い!)、太陽族(もっと古い!)、なにか集まって悪だくみを相談しているかのようである。

夏目漱石 『私の個人主義』

今回は『書斎の窓』と言うより、『テレビの窓』になってしまったようだ。要は、共同体の保険機能は社会の恵まれない階層にとってより重要だが、逆に社会の恵まれた階層が共同体を形成すると、それは階層社会になってしまうということだ。またそれが権力や支配と結びつくと大問題であって、この意味で『お友達内閣』などが批判を受けるのは当然である。

最後は格調高く夏目漱石の有名な講演「私の個人主義」からの引用で締めくくろう。

もっと解りやすく云えば、党派心がなくて理非がある主義なのです。朋党を結び団隊を作って、権力や金力のために盲動しないという事なのです。それだからその裏面には人に知られない淋しさも潜んでいるのです。すでに党派でない以上、我は私の行くべき道を勝手に行くだけで、そうしてこれと同時に、他人の行くべき道を妨げないのだから、ある時ある場合には人間がばらばらにならなければなりません。そこが淋しいのです。

さすがに漱石はいいことをいう。結局、多くの人々にとっての問題は淋しさに耐える力が足りないことにあるのではないだろうか。

情報爆発のもとでの暗黙知共有: 日本人「論」の「行動」経済学 (6)

脇田 成 (首都大学東京)

有斐閣『書齋の窓』掲載

勉強法と勝間ブーム

ビジネス街の本屋に行くと、今並んでいるのは勉強法の本である。どうやって勉強するか、どのような本を読むか、そういったハウツー本が並んでいる。中でも大スターは勝間和代氏であり、彼女が推薦する本は大変良く売れるそうである。僻んで言うんじゃないかもしれませんが、昔は難解な事柄を易しく書いたお手軽本じゃいけない、原典を読み、古典を読み、と言われたものだ。ところが今ではあふれかえったお手軽本はどれがよいか、という新たな段階に達している。

この状態は単行本作成の技術革新やインターネットの普及によるものだろう。昔に比べて、簡単に印刷物が作成できるようになったことはよく指摘されることである。また WEB 上では玉石混濁ではあるものの、大量の情報が流れている。ハル・ヴァリアン(大学院向けミクロ経済学教科書でお馴染み)らの調査では、2002 年 1 年間で生み出されたデータは 5 エクサバイトと推計されるが、2006 年にはデータ量は 161 エクサバイト、2010 年には 988 エクサバイトにもなるそうだ。エクサバイトとはギガバイト、テラバイト、ペタバイトときて、その上の単位で、1 エクサバイト=100 万テラバイト=10 億ギガバイトだそうで、このような情報量の拡大を『情報爆発』というそうだ。

このような情報爆発のもとで、どのように勉強してゆけばよいのか、悩む人が多いのも当然である。しかも混乱に輪をかけるのは日本古来の習練の方法ではないか、という点が今回の主題である。

型と習練の方法

落語家の柳家小三治が高座で述べていたことだが、寄席では前座という見習いが太鼓を叩いて、区切りをつける。太鼓は修行の一環でもある。この頃の前座の太鼓は教則本そのままに叩くばかりで、寄席らしい雰囲気が出ないそうだ。落語は「らしく」する芸であり、全体の雰囲気が大切である。ルール通り、教則通りやっただけでは、芸にならない、というのだ。

その小三治が推薦する本が、森下典子著『日日は好日』(新潮文庫)である。この本は 20 年間のお茶の稽古をたんと綴った本である。お茶の稽古はただひたすら師匠を真似るところにある。そこに理論とか原則とか、というものはない。しかしいつのまにか分かってゆく、納得してゆくというプロセスをたどったものだ。

型をなぞる日本の訓練

本居宣長は理論的に分解することを『からごころ』と言って排し、ありのまま見つめることすなわち『いにしえごころ』を称揚した。この『いにしえごころ』のもとで、日本的な習練の方法が、周辺知識から理解してゆく方法をとると指摘する向きは多い(教育学者東洋は『滲み込み型』と名付けている)。具体的にどうするか、こうしたらよい、と教えることはなく、怖い師匠がただダメというのである。イメージの沸かない方は、往年のドラマ梶原一騎原作の『柔道一直線』での師匠役、高松英郎扮する車周作を想像すればよいのではないか。高松英郎は、とにかく怖かった。いつも理不尽なことを言って、桜木健一扮する一条直也を鍛えてゆくのである。柔道一直線の決め技と言えば二段投げだが、これはどう考えても無理である。一度、相手を空中に投げ飛ばすと、走っていてそれを受け取り、もう一度投げるのである。

二段投げはともかく、このような師弟の物語は『美味しんぼ』など数多く、まあ講談などから受け継がれ

たものだろうが、巨人の星の星一徹・飛雄馬親子など梶原一騎漫画の一つのモチーフをなすものだろう。あまり怖い師匠もどうか、とは思いますが、大学の今の雰囲気だと病院が「患者様」と呼ぶように、学生様と呼べとお達しが出るのも間近ではないだろうか。(全く本筋とは関係ないが、ここまで書いて故高松英郎氏をインターネット上の百科事典 Wikipedia で調べると「グラビアアイドル武市幸子は娘である」という記述があった。怖い師匠も家庭では違うようだ)。

自ら発見させる教育手法

それではなぜこのような教育方法をとるのだろうか。多くの論者は日本の習練の方法として「自分で発見させる」と言う点を強調している。たとえば歌舞伎役者十一代目市川海老蔵は「細かく教えて下さると、それはよく分かる。でもその分、ちょっと自分の考える力が浅くなる」(石山俊彦『楽屋のれん』演劇出版社)と述べている。(往々にして海老蔵の歌舞伎が少し妙なのは、海老蔵自身で考えた結果であり、長い目で見守る必要があるのだろうか。)

環境や周辺を整えておいて、自分で発見させる、そうでなくては身につかない、というのだ。これはある種の芸術が暗黙知に基づく部分が大きいからだろう。暗黙知とは『知ってるのに言い表せない』領域であり、例として自転車の乗り方や顔の見分け方などが挙げられる。この「言い表せない」という暗黙知の状況では、「見える化」などと言っても、周辺から攻めていかないと習得できないのではないのか。

実際、このように周りから攻めていくのが、日本的習練の方法であるので、我々はロジックが同じ、中身が同じと言われても、プレゼントの中身も大切だが、包装も大切だと思うのである。たとえばオペラの現代的演出というものがある。現代的扮装でオペラを上演する方法であるが、どうもこの方法は歌舞伎にはそぐわない。歌舞伎が現代の服装では歌舞伎にならない。歌舞伎らしいコスチュームで歌舞伎らしい音楽で行わないとどうも気分が出ないように感じるのである。

環境を整えてまねをし、「時間を貸す」方法

このような暗黙知を習得させるためには、二つの方法が必要となる。まず第一の方法として、環境を整えて師匠のまねをする、ということであり、ここまで述べてきたことである。次にその修行には長い期間が必要となることである。我が国の経済諸慣行を一言でまとめるのなら、長期継続関係が最も好適な言葉だろう。長期雇用制やメインバンク制度など、企業と労働者、企業と銀行の長い関係である。

筆者は長期訓練・継続関係は日本の競争力の源泉であり、これを放棄することは自らアドバンテージを失うものとする。ただここで述べたいことは、手放しの長期関係礼賛ではない。別に私がほめなくても、そういった書物は大量にあるからである。

むしろ雰囲気を整え、時間をかける日本古来の教育法は、ただ礼賛しておればいいのか、と考えると、それはなかなか難しい。まず長い目で悟らせるために、誰でも時間を貸すわけにはいかない。そこに選別が必要となり、選別には不満や差別がつきものである。第二に乱用の危険性が大きいことである。

右と左

まず秩序を保つためには論理的に説明するよりも、ただ雰囲気を保つための行動が自己目的化しやすい。例で言えば国旗国歌問題である。集団の秩序は大切なことだが、秩序を守るために国旗国歌の使用が必要とは限らない。また伝統を守ること、伝統的修練を尊重すること、たとえば皇室を崇敬することとは必ずしも同一ではない。

さらに時間を貸す、自分で悟らせる、皆大事な教育方法である。しかしながら、これは教える側にも教わる側にも苦しい方法であるがゆえに、実は極めて形骸化しやすい教育方法であると言わざるを得ない。

そこで、ある種の家元制のお稽古ごとのように「形から入る」。そうすると、分かりやすい。形から入ることで誰もがある程度は取っつきやすくなる。しかしそれは「形」であるから、所詮は形骸化しやすいと言うことである。こう考えると、昔の大学院のように、指導をほとんどしないという方法も一理あったのではないだろうか。

碧梧桐と虚子

形や型を巡る対称的な立場として戦前の二大俳人の論争を見てみよう。河東碧梧桐と高浜虚子は共に俳句・短歌の革新者正岡子規の同郷の高弟である。しかし二人の歩んだ道は異なったものであった。虚子が伝統的な花鳥諷詠のもと、五七五の定型を重視したのに対し、碧梧桐は自由律のもと形式にこだわらない句を目指した。虚子は雑誌『ホトギス』によって、弟子育成に励んで、俳壇を制覇したが、碧梧桐はその派から、種田山頭火や尾崎放哉と言った著名な俳人を生んだ。たとえば山頭火の有名な句

分け入つても分け入つても青い山

は五七五にはとらわれていないことが分かる。いささか乱暴にまとめれば、虚子は大衆に俳句の型を教えたが、碧梧桐の派からは型にとらわれない天才俳人が出現したと言えよう。以上の経緯から分かることは、ある種の型は大衆化には有効だが、ブレークスルー(あるいは型破り)には阻害要因となりうるのかもしれないということである。

日本的習練の方法のポイント

日本的習練の方法のポイントをまとめると

- [a] 時間を貸し、自分で考えさせる、という方法は効果的である場合が少なくなく、この点はおおかたの賛同を得られるであろう。しかし、
- [b] この方法が型をなぞる段階で終われば、ひたすら真似をするだけとなってしまう、また天才の出現やブレークスルーを阻害する。
- [c] さらに保守派と言われる人々は古いものは何でもよいという、考え方に立ちやすく、シンボリックな現象のイデオロギー的対立に陥りやすい。

もちろん日本的習練の方法であっても、古いものを何でも真似をするわけにはいかない。これと見込んだ師匠の弟子になるわけであるから、それなりの選択のプロセスは働いている。しかしながら時間をかけ、教える側の権威を保つ教育法は、「個性尊重」という立場から攻撃される傾向にもあるように思われる。そこで論理立てて、かんで含めるように説明すると「考える力」が育たないことになる。要するに上記三点の切り分けが不十分であるように思うのだが、どうであろうか。

選択肢が多すぎる!

さて勉強法の話に戻ろう。IT化による情報爆発のもと、何を勉強すればよいのか、指針を求める人が勝間ブームの背景にあることは既に述べた。もう一つのポイントは周辺知識を求める日本人の勉強法である。いつ役に立つかどうか分からないが、なんだかためになりそうだから勉強する、というビジネスマンやビジネスウーマンが多いのである。

TVのCMでもやっているように、選択肢が多すぎると人は選択できない、という弊害を行動経済学は指摘してきた。そう考えると情報洪水の前で立ちすくんでいる人々には、勝間氏の本は良い指南書であるのであろう。こうやってネタにするのだから、立ち読みですませず一冊ぐらい買ってみようかと筆者も考えた。しかしながら勝間氏の勉強法の本も多すぎて、選択肢が多すぎるような気もしないではないのである。

タダほど高いものはない: 日本人「論」の「行動」経済学 (7)

脇田 成 (首都大学東京)

有斐閣『書齋の窓』掲載

『七人の侍』の経済学

故黒澤明監督の『七人の侍』は言うまでもなく、日本映画の大傑作である。野武士に襲われることを知った村の農民たちが、「腹一杯メシを食わせる」と言う条件で、七人の侍を雇う。七人は見事に野武士を撃退するが、侍も四人は死んでしまう。あらゆる要素がつまっている欲張りな映画と、米国で評されたように、この映画には考えさせられる点はいくらでもあり、

- 老練な志村喬が、若くて一本気な三船敏郎を教え導くというような、時に家父長的師弟関係と言われる黒澤映画に共通なモチーフや、
 - 地付きの農村共同体と流れ者の専門職である侍との相克
- など興味深いテーマがあるのだが、本稿では「腹一杯メシを食わせる」という百姓と侍の非金銭的契約を考えてみたい。

その理由は近年の行動経済学では非金銭的な報酬が重視されているからだ。『予想通り非合理』(ダン・アリエリー著 早川書房)は楽しい行動経済学の本だが、そこでは非金銭的な社会的規範が世の中を住みやすくしており、金銭的な取引の導入(託児所における罰金制度)が好ましくない結果をもたらす事例が紹介されている。ただ何でもかんでも金銭取引が進んだ米国ではそうかもしれないが、日本ではこれが当てはまるのかどうかは分からない。また社会的規範の過剰は、日本ではさまざまなコンテキストで「封建遺制」として問題になってきたようにも思われる。そこで非金銭的契約の問題を、侍になぜ金を支払わないのか、貧乏であっても、少しは支払ってもよいのではないか、という視点から考えてみよう。

『荒野の七人』と農民の自立性

よく知られているように『七人の侍』には、ハリウッドのリメイク版『荒野の七人』があるが、それでは契約はどうなっているだろうか。実はリメイク版では6週間20ドルの契約となっていて、破格の安さではあるが金銭契約を結んでおり、かなり対等の契約に近い。この『荒野の七人』を見ると、農民とガンマン七人との距離がオリジナルに比べて近くなっていることが分かる。まず

- 農民は自ら戦おうとしている。
 - 農民はある程度、自律的である。
 - 最後に村の娘と恋に落ちたガンマンの若者(ハル・ホルブルック)は村に残る、
- などである。本家の『七人の侍』は侍と農民の断絶をよりシャープに表しており、そこで三船敏郎扮する菊千代が百姓と侍をつなぐ人物として造形されている。しかし断絶のない『荒野の七人』では菊千代に対応する人物はいない。そもそも木村功扮する若侍が津島恵子扮する百姓娘のために、藤原釜足の罠になるとは、決して想像できないだろう。

『荒野の七人』における農民重視の理由は、ロケ地であるメキシコの政府の要請によるものでもあるらしい。『荒野の七人』DVDにはメイキング・フィルムが付いているのだが、このなかでこれまでの西部劇ではメキシコ人の扱いがひどすぎる(!)ことから、メキシコ政府が農民の描き方についてさまざまな注文をつけたことが明らかにされている。

オリジナルの『七人の侍』にも農民軽視であるという批判がもともとあり、映画評論家の佐藤忠男は『黒澤明の芸術』(朝日文庫)において、颯爽とした侍たちに対し、百姓があまりにみじめすぎると感想を漏ら

している。たしかに今でこそ日本人はサムライ・ジャパンなどと言っているが、多くは農民の子孫であり、武士に蹴散らかされていた立場から考えれば、この感想は当然かもしれない。『七人の侍』では百姓たちの願いを受け入れた志村喬が「このメシおろそかには食わんぞ」と言う名シーンがある。これは契約の締結と言うより、侍のヒーロー性を強調しているのである。

社会的規範としての一宿一飯

それでは『七人の侍』の発想はどこから得られたのであろうか。脚本を共同執筆した橋本忍のメモワール『複眼の映像』(文藝春秋)によると、もともとの脚本には『日本剣豪列伝』という言わば講談の主人公をオムニバス形式で映画にしようとした経緯があるという。そこから剣豪の修行がどのようになされたか、に発想がゆき、戦国時代には百姓が食事を提供する場合、用心棒となるという慣行が存在することから、百姓が侍を雇う話につながった。つまりもとは兵法者の一宿一飯のお話なのである。

この一宿一飯の義理と言え、ヤクザ映画や任侠モノでおなじみである。ヤクザ映画で不思議に思うのは、一晩泊めてもらったぐらいで、どうして落ち目の親分を助けて命をかけなくてはならないのかという点である。実はこれは高倉健が物好きだからとか、ヒューマニズムにあふれているからではなく、それは「旅にん制度」を成り立たせる社会的な規範であるという。源了圓著『義理』(三省堂)は極めて興味深い本だが、同書によるとの一宿一飯は社会的規範であり、それを破ると共同体から忌避されたという。今風に言えば、非正規雇用の流れ者のセーフティ・ネットと言うことになるだろうか。

意識改革と環境問題

一宿一飯の恩義で命をかけなくてはならない、これは当たり前であるが、運不運のリスクが分散されておらず短期的な経済合理性に欠けた行動である。逆に言うと、もう少し金銭取引化すればよいのではないかと、と思われる事例は少なくない。問題はゼニカネじゃない、となると、社会的規範は神聖化されて大変である。

- まず戦時の国際貢献である。戦争にカネを払えばよいのか、人的貢献を行いショー・ザ・フラッグしなくて良いのか、と話題になったことは再三ある。
- 環境問題とゴミ捨ての煩雑さである。

環境問題にはさまざまな疑問が浮かぶが、門外漢でもあり、温暖化とそれへの対策の是非についてはここではふれない。しかしゴミの分別については何とかして欲しいと思う。各自治体ごとにルールが異なり、どこに何を捨てて良いのか、いつもびくびくしてはならない。近年はマンション住まいなので、朝のゴミ捨てから解放されたが、昔はゴミを捨てるぐらいで、早起きなんか出来るものか、と夜中にゴミを捨てて何度も怒鳴られた私は思う(その節はすみません)。

先日亡くなった反骨のロックのカリスマ、忌野清志郎ですら、大家さんに怒られるので、昔からゴミの分別をしていたとインタビューで答えていて、笑ってしまった(Youtube で見る事が出来ますので、ファンは忌野、環境で検索して見てください)。

よく消費者の利便性を求めよとか、消費者庁を作るとか、言うが、ゴミ捨ての利便性を高める方が、より家計の効用最大化に寄与するのではないかと。ベストセラー環境問題暴露本によると、プラスチックやペットボトルの分別は無意味であり、ほとんどあとで混ぜて燃やしているという。それではなぜ分別を進めるのかと言え、ただ環境意識を高めるためと言うことらしい。意識を高めるために、いい加減なことを言って強制して良いのだろうか。温暖化に反対する暴露本は科学的ではないという意見もあるが、やはり環境政策を推進する側に誠意が欠けているのではないかと、という気持ちがぬぐえない。

天皇機関説と密教顕教

実はこのような大衆向けの説明と知識人向けの説明が食い違うケースは多々あるが、仏教上の概念である顕教と密教にたとえて永らく説明されてきた。顕教は普通の人間に理解できるよう説かれた教えだが、密教は真理が理解できる者にのみ説かれている、という区別である。この密教と顕教の区別にたとえて、戦前の天皇機関説は説明される。

- 一般大衆向けの顕教としては、天皇は絶対的な権威であるとするが、
- 東大法学部を中心とする一部のエリート間の密教としては、国家の機関であると認識するというダブル・スタンダードが破綻したのが昭和初頭の状況である。

お金も意識改革もいけない

いささかゴミ捨ての話題で興奮して、天皇機関説まで筆が滑ってしまったがしまったが、話を本筋に戻そう。気持ちを一にしてお国に奉公するというのは、軍歌のモチーフだが、総動員体制は環境問題では生きていると言える。もともと日本では社会的規範がよりエスカレートし総動員体制化する危険が大きいと、これまで考えられてきた。お金はなまなましいが、社会動員はもつといけないというのは、戦時中の経験もあって、良くある話である。現在の日本で最重要課題は少子化であり、対策が急務であることはさすがに浸透してきた。しかし足枷となるのが、対策を金銭的報酬で行っても、非金銭的報酬で行っても反対意見や抵抗が強いという問題である。

- 児童手当のような金銭的報酬(現金給付)であれば、子供を金で買うようで怪しからんし
- 非金銭的報酬であれば、「産めよ、増やせよ」という社会的規範になって、戦前のようにない、

と言われる。そこで現状は育児休暇や保育所設備など、間接的な手段(現物給付)に終始していることは周知である。この結果、団塊ジュニア層は結婚せず、子供を作らず、労働力率は高いが非正規労働に従事している割合が高くなっている。

マクロ経済全体で見れば、奇妙な機能がてんこもりでガラパゴス化を揶揄される「ものづくり」や過剰なサービスに代表される消費財・サービス生産よりも、将来の安心を生む人口増加に資源をシフトしたほうが良いのは明らかであると言えよう。しかしながら現状は仕事も子育てもバリバリ行うスーパーウーマンですら、助かるとは思えない逆進的かつ非効率な政策になってしまっている。筆者は児童手当のような金銭的な報酬に踏み込むことが、結局は多くの人にとって助かるのではないかと考えている。

実は金銭でも非金銭でもいけない、という問題は、日本の社会保障や労働などの政策に共通する問題である。そこでどうするかと言えば、間接的手段に訴える、つまり就労機会やハコモノを建てるわけであり、そのため 90 年代に建設業が肥大化したことはよく知られている。

勝ったのは百姓たちだ

冒頭に金銭的取引と非金銭的取引の区別を考えた。『七人の侍』は偶然出会った勘兵衛と百姓の非金銭的取引を描いている。しかし実際には非金銭的取引は、共同体の内部で、あるいはよく知り合った「顔の見える」人間関係でなされることが多い。そしてエスカレートしたそれは息苦しく、過剰なパニッシュメントにより効率的とは限らない。そして金銭取引の過剰に疲れた米国と異なり、日本の現実はまだ金銭取引化が足りないのではないだろうか。

映画のラストでは七人の侍は三人に減ってしまい、志村喬扮する勘兵衛はぼそっとつぶやく。「勝ったのは百姓たちだ。」やっぱりタダほど高いものはないのではないか。

ボトムアップか、トップダウンか: 日本人「論」の「行動」経済学 (8)

脇田 成 (首都大学東京)

有斐閣『書齋の窓』掲載

太郎冠者のモラルハザード

狂言に出てくる主人と太郎冠者の関係は、召使いである太郎冠者が賢く、主人や大名は少々抜けていることが多い。中学校の教科書にも載っている『附子』や、『棒縛り』などは、太郎冠者が主人の裏をかいて、酒や食べ物を飲み食いする話である。経済学にはプリンシパル(依頼人)-エージェント(代理人)理論というものがあり、代理人の努力を引き出すためには、どのような報酬体系がよいか、など両者の関係が盛んに考察されている。そこで主人がプリンシパルで、太郎冠者がエージェントと考え、通常のプリンシパル=エージェント理論で考えてみると、狂言の中にはさまざまなバリエーションがあることに気付く。

なかでも『三人かたは』という狂言は(この題名では絶対にNHKでは中継がされない)、これはそのまま社会福祉のアファーマティブ・アクションとモラルハザードの話なのである。山一つあなたに有徳人(金持ち)が障害のあるものを召し抱えたとお触れを出す。そこで博打打ち三人が、それぞれ眼、耳、足に障害があるといって有徳人をだます。有徳人が出かけた際に三人は酒宴となるが、有徳人が急に帰ってきたので、あわててしまい障害を取り違えてしまってウソがばれる、という話である。

このほかの狂言でも、さまざまなモラルハザードが演じられるわけだが、ここで前提となっているのは太郎冠者は知恵がある、ということである。逆に主人や大名はさほど知恵がない、とされることが多い。そういった下位者のほうが有能であるとする構造はかなりの程度まで普遍的であり、江戸時代には『主君「押込」の構造』(笠谷和比古、平凡社)と言われるように、殿さまは家来に監禁までされてしまう。

御雇い外国人と勝海舟

明治期の御雇い外国人であったバジル・ホール・チェンバレン(1850~1935, 1873年来日、1911年離日、東京帝国大学文学部名誉教師)はその著書『日本事物誌』(東洋文庫・平凡社、「礼節」の章)において、

日本の下役たちが〔上役の言うことをきかずに〕自分で物事を考えるという習慣、特に自分のほうが使用者よりもずっと利口であるという癖

について述べており、

不服従が慣習となっている。それはわざと悪意をもってする不服従ではない。主人がやるよりも自分のほうがもっと良く主人のためにやれるのだという、下級者の側の根深い信念に基づくものである

と見ている。

このような下級者の信念から、勝海舟の有名な逸話(維新後の勝の談話を集めた『氷川清話』(引用は講談社学術文庫版より)による)を捉え直すことも出来るだろう。幕末に、幕府の軍艦・咸臨丸で渡米した勝海舟は帰国後、老中から「何か眼を付けたことがあろう」と言われ、こう答えた。

「亜米利加では、政府でも民間でも、およそ人の上に立つ者は、みなその地位相応に伶俐で御座います。この点ばかりは、全く我国と反対のやうに思ひます」と言ったら、御老中が目を丸くして、「この無礼ものひかえ居ろう」と叱ったつけ。ハハハハハ。

御輿は軽くてパーがいい

言わばこれらの事例は企業や政府など日本的組織のボトムアップ的な意志決定の源流をなすもので

あろう。よく日本は下の者はしっかりしているが、上のリーダーはダメだと言われてきた。しかしこれは逆の側面があるのではないかと考えてみるのが本稿の主題である。下の者がしっかりしすぎて情報を挙げず、上のリーダーシップを発揮することが出来ない側面があるのではないかと。御輿は軽くてパーがいい、とは有名な発言だが、軽い御輿をわざわざ選んでいるのではないだろうか。

田中角栄元首相秘書の故早坂茂三氏のエッセイ風の著書は一時、盛んに出版されていたものだが、その中の『宰相の器』(集英社文庫)で、以下のように述べている。

官庁には万年係長・万年課長補佐と陰口されるノンキャリア組がいる。(中略)となれば秀才課長は“お客さん”であり、課の実権は課長補佐、万年係長が握る。これを“窓口天皇”という。

日本は多神教社会や神の国などと言われるが、窓口ごとに天皇様がいらっしゃるとなると大変である。大学教師も研究費の解釈で事務ともめる方は多いだろうが、担当事務方は窓口天皇様と思えばあきらめがつくのではないだろうか。このような(重々しく言えば)分権的な状況は日本政府の外交交渉を巡って指摘され、「課長の数だけ、日本政府がある」と言われてきた。歴史的に見ても、鎌倉幕府は恐るべき体制であり、天皇の下に鎌倉幕府の将軍が出来、その下に北条家の執権があり、最終期には北条氏宗家の執事である内管領が実権を握った(昔のNHK大河ドラマの『太平記』では北条家内管領の長崎円喜をフランキー堺が演じていた)。

「事件は会議室で起きているんじゃない、現場で起きているんだ」というのはTVドラマ『踊る大捜査線』の名ゼリフであり、現場で苦勞する多くの人々の共感を呼んだが、実際には会議室に現場の情報が上がらず、指示が不明確で現場で闇雲に右往左往している場合も多いのではないかと。あるいは会議室の決定が非現実的になってしまう理由は、情報が集まらないためではないかと。

この点を図式的にまとめると

- 厳格な指令・ルールの下で「下」が言うことを聞かなくなる米国
- ルーズな指令・ルールの下で「上」が事態を把握できなくなる日本

ということになるだろうか。

経済学のモデル分析において、コントロール権を現場に配分し権限委譲を行えば、よりやる気が出て、効率的になると言うモデルが多い。もちろんそういった面は重要だが、しかしそれは「上から目線」で恐縮だが、所詮それは「匹夫の勇」を引き出すだけという結果に陥る場合も少なくないのではないかと。

さらに経済学では権限がしっかりと決まって配分できることを前提として、権限をどう委譲するか、ということを考えることになる。しかし日本の現実には現状がはっきりと分からない状況であり、計画者はベイジアンプロセスに直面しているとも言えよう。

現場の暴走をどう食い止めるか

さて現場を放置し、窓口天皇様を留め置いておくと、非常に煩雑で専門的な手順が出来上がってしまう。それを打破するのが人事管理の要諦である。下の者が自分固有のルールを作り上げてしまい、端からは何がどうなっているのか、さっぱり分からない状況を避けるのである。そこでジョブ・ローテーションが必要とされる。担当をぐるぐる回して、現場の(情報)独占力を打破するわけである。よく組織の歯車などと言うが、歯車のスペアをいくらでもこしらえればよいわけである。

頻繁なジョブ・ローテーションと並んで、ボトムアップ集団に必要なのは目標をはっきりさせることである。誰が何をして何をしないかという仕事の範囲がはっきりしない日本の職場では、どこに到達するのか目

標をはっきりさせなくてはならない。そこで皆に号令するカリスマ型経営者のもと組織の一体感が形成されることが多い。ここでは日本政府における小泉元首相とその後継者を比較してみよう。失礼だが、小泉氏と後継者では、さほど政策の理解力に差があったとは思えない。しかし小泉氏はワンフレーズで官僚に目標を与え、評価基準をはっきりさせたところに当時の成功の要因があると言える。後継者たちは部下たちが何をやっていいかわからないし、「これをやりました」と言えば、「そういうことを頼んだんじゃないんだよ」と混ぜ返しそうな人たちがばかりであった。

もちろんワンフレーズで一方向に旗を振るといふ政治は大きな問題をもたらす。方向性が大きく振れすぎるのである。あまり全体が見えていない人たちに、旗を振って、あっちに行け、こっちに行けという状態はもちろん効率的ではない。ワンフレーズ・ポリティクスに皆が喝采したのも、ボトムアップ組織の機能不全が閉塞感をもたらしているからだ。そこに英雄待望論がわき起こる危険があるという言辭は、少し古めかしいだろうか。

武悪とダブル・モラルハザード

さて狂言の名作と言われる演目に『武悪』がある。武悪とは従者の名前であり、太郎冠者の同僚である。

- 出仕を怠った武悪を討て、と主人は太郎冠者に命ずるが、
- 太郎冠者は同僚である武悪を哀れに思い、逃がしてしまう。
- ところが武悪と主人は鉢合わせしてしまい、討たれたはずの武悪は幽霊の格好をして主人を脅かすというストーリーである。『武悪』がなぜ名作なのかについては、さまざまな側面があるが、ストーリーから指摘すると、エージェント(武悪や太郎冠者)がモラルハザードを行う単純な構造ではなく、プリンシパル(主人)の理不尽な命令に対し、エージェントがプリンシパルに意趣返しを行うどんでん返しがあるからである。

このようなプリンシパルの横暴といった側面を、経済学ではダブル・モラルハザードという。

織田信長(プリンシパル)が秀吉や光秀(エージェント)のインセンティブを高めるための配慮はエージェントのモラルハザードを阻止するための問題だが、光秀の領地を一方的に取り上げてしまう場合は、プリンシパルの契約違反であり、それをダブル・モラルハザードというのである。つまりエージェントにもプリンシパルにも契約違反の危険性があり、両者を考慮して問題を考えなくてはならないと言うことである。

筆者が常々思うことは、横暴なプリンシパルへの配慮や規制が、現状の経済問題を考える際に欠けているのではないか、ということである。

- モンスター〇〇と言われる現象は、病院の患者であれ、学校の父兄であれ、皆、プリンシパルの横暴を示したものであり、
- 使用者による解雇の制限を定めた解雇権濫用の法理は、モラルハザードが望ましくないことと同様に、ダブルモラルハザードが望ましくないことを反映したものにすぎないが、企業側に無批判に立った論者により反対論が絶えない。
- また大衆向けパフォーマンスのために、部下をいたずらに悪者にする地方政治家はいかかなものか、と感じられる。「お客さまは神様です」というが、プリンシパルは神様でも何でもなし、さらにエージェントは奴隷ではないのである。

日本の組織を考える上でのボトムアップかトップダウンか、という二分法は、たぶんおおよそすぎるのだろうが、それでもボトムアップ組織の機能不全をトップダウンで克服する動きは恐ろしいという認識はもう少し必要ではないだろうか。

人格を高め、恒心を保つ: 日本人「論」の「行動」経済学 (9)

脇田 成 (首都大学東京)

有斐閣『書齋の窓』掲載

吾唯足知

おもしろき こともなき世を おもしろく すみなすものは 心なりけり

これは明治維新の英雄、高杉晋作の辞世の歌である。司馬遼太郎の小説やエッセイでは何度も出てくるので、御存知かもしれない。死の床にある高杉晋作は前半の部分、おもしろき こともなき世を おもしろく、でつかえてしまったが、枕元にて看病していた野村望東尼が、すみなすものは 心なりけり、と後の句をつけたという。望東尼は禅宗の尼僧であり、心の持ちようが大事という点は、従来からの禅宗の修行観を良く表している。

修行してゆくと、少しのことで満足するようになる。これは「足るを知る」ということである。石庭で有名な京都の龍安寺(臨済宗妙心寺派の寺院)には、知足の蹲踞(つくばい)があり、この蹲踞には「吾唯足知」(われ、ただ足るを知る)の4字が刻まれている。また水を溜めておくための中央の四角い穴が「吾唯足知」の4つの漢字の「へん」や「つくり」の「口」として共有されているのが見どころであり、お土産の栓抜きなどにあるので、御存知の方も多いかもしれない。

この連載は夏目漱石の引用が多くて、少し芸がなく恐縮だが、『我が輩は猫である』の一節には

「吾人は自由を欲して自由を得た。自由を得た結果として不自由を感じて困つて居る。夫だから西洋の文明は一寸いやうでつまり駄目なものさ。これに反して東洋ぢや昔から心の修行をした。その方が正しいのさ。」

とあり、欲望をコントロールすることの重要性を力説している。もちろん東洋と西洋の比較論や禁欲といった側面は、マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』などを考えれば、話は単純でなく、まあうっかりしたことは言えない。さらに近年では経済学においても学会誌 *Journal of Economic Perspectives* などでも文化・宗教と経済の関係の展望論文が掲載されている。洋の東西を問わず、ここでは心の修行(英語で言ってみればセルフ・コントロールになるだろうか)とは、どのような意味を持つかを考えてみよう。

文化形成の経済学

心の修行とは内生的に効用関数に変化していく状況と言うことになるだろう。それを捉えるには、いわゆる習慣形成効果や中毒効果を効用関数に導入する必要がある。マクロ経済学では消費関数パズルというものがあり、所得変動に対し消費の変動がなめらかで変動が小さいのはなぜか、と言う点が従来から盛んに研究されてきた。そこで習慣形成効果が注目されてきたわけだが、一時はこの方面の研究は社会学的印象論的とされて、盛んでなかった。しかし近年の動学的最適化に基づく消費関数の議論においても、金利の激しい変動に対して消費の変動はやはり小さくなめらかなので、これらの効果は見直されてきたと言える。

ここでもし心の修行が操作可能的なものであるならば、それは修行=習慣を通じて効用関数を制御するプロセスと考えられるのである。また個人の効用関数の変化のみならず、経済全体に広げて言えば、文化形成の経済学と呼ばれる一群のモデル分析が存在する。そこでは、文化を公共財や外部性的な側面を通してモデル化するのだが、経済全体で見ても保存すべき「習慣」と縮小すべき「中毒」が存在すると言える。つまり文化の保護と言っても、「失われし良きもの」を守っているとは限らない。

この点は「心の修行」にも言えることであって、現実には何かを修行して人格が必ず高まるとは言えないだろう。また「心の修行」というと、どうも選ばれた人間だけが、独力で悟りを開くというのだろうか、「皆さんのおかげです」なんて決して言わないエリート主義の嫌みがあるようだ。

宗教ポートフォリオ

心の修行がどうも個々人に留まる傾向は、実は日本人の宗教観とも関連している。つまり「日本人は、正月は神社へ行き、12月になるとキリスト教になり、亡くなると仏教徒になる」という状況である。「このあいまいさこそが日本の文化だ」という人もいる。しかしこれは単に雑種文化(加藤周一)のごたまでではなく、宗教の使い分けをしているのではないか。

阿満利磨「仏教と日本人」(ちくま新書)は、

- 神道は社会的共同体的であり
- 仏教は個人的

な色彩が強いと指摘している。筆者はそんなことは思いもしなかったが、そう言われればそうである。世を捨て一人で出家するのであり、村の鎮守の神様はただそこにあって、布教活動をするようには思えない。一人で死ぬとお寺で法要が行われるが、皆で死ぬと靖国神社にまつられる。また神として祀られるのは共同体に尽くした人であり、秀吉や家康など偉人は死んで偉い神様になるのであって、仏様になるわけではない。

そう考えると、いろんな神様がいて、安産の神様、交通安全の神様、クリスマスの神様が分業している、という日本人の宗教観も悪くないのでは、と思えてくる。個人は個人の世界を持ち、社会や村落共同体にはお祭り等で参加する。宗教ポートフォリオを組んでおり、分散信心の結果、リスクは軽減されるという宗教工学などの新しい学問が出来るかもしれない。「日本民族の柔軟性と、叡智ではないでせうか」と保守派の論客なら歴史的仮名遣いで言うだろう。もともと多神教の世界では、共同体の神様がいて、それが征服されると既存の神と家族と言うことになって神様の人数が増えてゆく。会社が合併すると、副社長が増えるようなものだ。

梶原一騎の個人主義

しかしながら仏教、特に禅宗が非常に個人主義的であることは、必ずしも社会にとって良いことかどうかは分からない。神道は無意識的に共同体を守るものであり、仏教は一人で解脱するものならば、共同体や社会を積極的に高めようとするきっかけがないようにも思われる。集団で解脱してカルトになるのも困るし、そこで江戸期以前は儒教と言うことになるのだろうが、教育勅語の時代でもあるまい。

もともと宮本武蔵に代表される剣豪は、一人で高まってゆくところに人気があるのであり、組織を作って行くわけではない。むしろ武蔵は既存の権威である吉岡一門をなぎ倒したりするわけである。このような剣豪像は、たとえば『巨人の星』等の劇画原作者、梶原一騎に受け継がれている。梶原一騎は最後の「少年読み物」出身者と言われるが、これは講談本から流れてきたものであろう。梶原一騎漫画の主人公は自分を高めることに余念がない。見方を変えれば、自意識過剰の個人プレーに走るのである。「巨人の星」の主人公、星飛雄馬は大リーグボールを投げることが出来る。時々打たれてもよいから、大リーグボールを交えて投げ続けた方がチームのためだと思うのだが、一度打たれるとすぐに姿を消して山にこもって新たな魔球の開発にいそしんでしまう。ただし「巨人の星」は既成の権威と集団の中で個人が高まってゆく話であり、それだから人気を呼んだのだろうが、本来の梶原漫画は強い主人公が組織に対して破滅してゆく話であると言える。

梶原一騎は空手やプロレスなど、格闘技ビジネスに深く関わったが、もともとは野球のような集団競

技に興味がなかったらしい。斉藤貴男『夕やけを見ていた男 評伝梶原一騎』(新潮社)によると、晩年というか狂乱期の梶原一騎の漫画は、『青春山脈』や『初恋物語』という題名で新機軸を打ち出そうとしても、いつのまにか暴力団と格闘技が出てくるストーリーになってしまったそうで、これはおかしい。回りは困ったが、恐ろしくて何も言えなかったらしい。

才能重視か努力重視か

さて心の修養に戻ると、西洋の文化が物欲過剰であることは日本の欠点の裏返しでもある。まず心の修養がいきすぎると「精神一到何事かなさざらん」という精神主義になってしまう。精神主義は努力を求め、闇雲のガンバリズムになってしまう。個人間の所得分配を決定する要因として重要なものは、才能と努力と運であるが、日本のように努力を重視しすぎるのも考えものである。

将棋やチェスは才能や実力がものをいうゲームであり、麻雀は(20年間不敗の神話をもつ桜井章一という人もいるが)少ないゲーム数では運に左右されるゲームである。どちらがより多くの人々が楽しめるかといえば、それは麻雀である。日本社会の評価基準はこのところ、グローバルゼーションと成果主義のもとで「将棋」化しており、優勝劣敗だけでは多くの人々は救われない。そこで時々、横山ノックのような人が必要とされるわけだが、現在の人気知事の言動は社会をますます殺伐とさせるだけのようになり、筆者には思われる。

共同体の中のハードボイルド

村上春樹のベストセラー『1Q84』(新潮社)はカルト宗教が主題になっている。この作品は周知のように、以前に村上春樹が行っていたオウム・サリン事件の被害者やオウム信者へのインタビューが基礎となっている。特に後者の『失われた場所で』(文春文庫)は興味深く、そこで村上はオウム信者を選民意識があると批評しており、そこが面白い。世間に負けてカルトに逃げ込んだのではなく、高次なものを理解するため選ばれたというのだ。

『1Q84』は、非常に読みやすく大部を一気に読めてしまう。これまでの村上小説と異なる点は、個人間内部で善と悪がないまぜになってくる点であると言えよう。主人公二人は言わば犯罪者であり、実はカルト集団と深い関わりがあるのではないか。これまでの村上小説は「悪」が外部にあったとするならば、『1Q84』では人間内部の「悪」が描かれているのではないだろうか。刊行済のBook 2まででは、カルトの実体についてさほど語られるわけではないが、多分出版されるであろうBook 3では、主人公とカルト集団の関係が明かされるであろう。

村上春樹の小説は一人で悪の集団と戦うような筋書きが多い。非常にストイックな主人公はまるでハードボイルド小説の探偵である。そう考えると、村上にはレイモンド・チャンドラーを翻訳しているし、「世界の終わり」とハードボイルド・ワンダーランド」と題する小説もある。ハードボイルド探偵というものは、自らにルールを課しストイックに犯罪を追求するものだ。それは一面では修行僧のようであり、これは本当に他人に対して親切なのか、あるいは迷惑をかけていないか、と悩む村上小説の主人公によく似ている。

しかしここまで述べてきた「心の修行」を村上小説の主人公(『海辺のカフカ』を除く)は行うわけではない。体の修行には熱心だが、煩惱に悩むわけではないのである。もはや人格は出来上がっていて、もともと欲望が希薄であると主人公は設定されており、事件に巻き込まれて「やれやれ」と言うばかりである。この「心の修行」の欠如に村上文学の世界的人気と、日本の文壇からの初期の不評の理由があるのではないだろうか。

それを言っちゃあ、おしまいよ: 日本人「論」の「行動」経済学 (10)

脇田 成 (首都大学東京)

有斐閣『書齋の窓』掲載

寅さんの怒り

フーテンの寅さんでお馴染みの、松竹映画「男はつらいよ」シリーズは日本映画のみならず、世界でもまれなヒットシリーズであったようだ。読者の多くも大ファンと言えないまでも、TV で偶然見始めると引き込まれ、結局、最後まで見てしまった方は多いのではないだろうか。主演の渥美清は没後、国民栄誉賞まで受賞した。(ただし黒澤映画を始めとする戦後の大スター三船敏郎は国民栄誉賞をもらえなかった。理由は、三船の愛人騒動らしいが、残念なことである。)

さて寅さんは葛飾柴又に時たま帰ってくる風来坊だが、当初は歓迎していた周りの人たち、おいちゃんや妹のさくらは寅さんを心配して、「しっかりしろ」とか「身を固めろ」とか苦言を呈す。そこで寅さんは「それを言っちゃあ、おしまいよ」と怒りだし、くるまやを飛び出して旅に出てゆく。

このような寅さんの行動は、生活の真実に向き合わず、情報の非対称性を促進して欺瞞のもとで生きる、と非難されなければならない。しかし映画シリーズの主人公はまあ不合理なもので、将来を見通し経済合理的な計算を瞬時に行うホモ・エコノミクスでは、せいぜい敵役にしかならない。東宝映画の加山雄三扮する若大将は、頼まれたらイヤとは言えない人物であり、契約の不完備性を促進している。(本当に近くにいる欲しいものだ。)これではいくら長期関係を大切にしている日本のメンタリティにおいても、現代ではさすがに骨董品だろう。加山雄三氏本人が借金で苦勞したことを考えると、大きな皮肉である。もともとヒーローとは、信念を貫き通したいという観客の「願望」と、現実の「行動」のギャップが、夢として人気を呼ぶのかもしれない。

駐日大使グルーの述懐

寅さんの「それを言っちゃあ、おしまいよ」というセリフは、本当だけど言う必要がない、あるいは言わない方が良く、という事柄を指していると言えよう。そう言えば「言わぬが花」など、類似のことわざもあるし、「皆まで言うな、俺が万事心得ている」というセリフも良くある。しかし「言っちゃいけない」というタブーのもとでは、社会構造の認識は進まない。そこで学問にはさまざまな「専門用語」「学術用語」が存在し、「分かる人には分かる」という状況を作り出しているのだと言える。しかしいつの間にか「分かる人」がいなくなったり、事実を事実として認識できなくなったりして、今連載でも触れた「密教」と「顕教」の使い分けができなくなってしまう場合もありうる。

特に日本の場合、大きな枠組みは輸入学問の傾向が強く、教育法は周辺知識から入る滲み込み型(本連載第6回)であるので、その危険性が強い。これに関して、太平洋戦争開戦時の駐日米国大使ジョゼフ・グルーが戦後、毎日新聞で行ったインタビューは有名だ。

日本人の大多数は、本当に彼ら自身をだますことについて驚くべき能力を持っている。…日本人は必ずしも不真面目なのではない。このような義務が、日本人が自分の利益に背くと認めることになると、彼は自分に都合のいいようにそれを解釈し、彼の見解と心理状態からすれば彼はまったく正直にこんな解釈をするだけのことである。

嫌みな言い方だが、たしかに時として、なにか大きなフィクションのもとで社会が回っているような気が

しないでもない。本連載を締めくくるにあたって、日本の経済社会を巡る大きなフィクションについて述べてみたい。

勤労の精神の閉塞

日本経済は大きな曲がり角を曲がったことは間違いない。そこで閉塞したものは 2 つある。まず「勤労の精神」の閉塞である。本稿でマクロ経済の状況を詳述するスペースはないが、働いて働いて、その見返りはとえば、小さくなっている。ところが日本の倫理を支える大きな柱は、言うまでもなく「勤労の精神」である。

そこで高齢者の勤労は促進しなくてはならず、女性の社会参加は促進しなくてはならず、若者の就職は支援しなくてはならない。少子高齢化社会に備えて労働力人口の急減対策は喫緊の急務である。急いで付け加えると、この 4 点はそれぞれ正しい方向であり、一つ一つを取ってみれば反対する理由はない。また勤勉な労働者が日本経済の牽引力であり、もういいや、と怠惰になってしまっただけは困る。しかし誤解を恐れずあえて言えば、全部を足し併せれば、実は現状のマクロ的状況では、つじつまが合わない。

労働需要が伴わないままで、供給を政策的に促進すれば、賃金が減少し能率も低下する。また労働条件も切り下がるばかりだ。この状況で「効率 10 倍アップ」とやらを目指しても、無意味な競争が激化するばかりだ。労働倫理の崩壊が言われるが、もともとマクロ的にちぐはぐなことをしている側面が強い。しかも役所のみならず専門家も縦割りのもと、状況の把握が不十分だ。

個の自立と河原町のジュリー

もう一つの閉塞は「自立した個人」の閉塞である。いわゆる戦後啓蒙において、日本の最重要課題とされたことは「個の自立」であった。付和雷同を排し、自らの良心に基づく自立した個人の存在が必要とされたのである。自立を妨げるものは、「封建遺制」であって、それは打破されるべきものであった。このような考え方は所得倍増計画の理論的支柱であった下村治にすら共通であり、孫引きという便利な手法を使うと、

日本国民の潜在的な創造力を、もろもろの前近代的な拘束から解放し、それを自由に、活発に発揮させることこそ、経済政策の中心目標でなければならない (沢木耕太郎「危機の宰相」『1960』文藝春秋所収 p.107)

とまで述べている。

そこで従来はホームレス支援の考え方にしても、今年の初頭にあった派遣村騒動とはかなり異なっていた。たとえば青島東京都知事時代にあった新宿西口騒動である。ホームレスは言わば自由人であり、大げさに言えば生活の達人の姿である。誇張されたイメージとしては故伊丹十三の映画『タンポポ』や、漫画『美味しんぼ』の辰など、料理がうまく美味しいものを知っているとまでなる。これらはもちろんフィクションだが、実在の浮浪者もショーアップされた取り上げられ方をしている。

筆者は京都近郊の生まれであり、70 年代には河原町のジュリーといわれる浮浪者をよく見かけたものだ。河原町のジュリーは蓬髪というのだろうか、縄文人のような髪型で、その髪は油じみてべったりと固まっていた。ジュリーとは京都出身の沢田研二のことだが、長髪から名付けられたのだろうか、実際の風貌はモンゴル系と言うのか、青空あきお(現芸名は横山あきお)に似ていたと思う。このジュリーはローザ・ルクセンブルグというロックバンド(経済学者ではない)にも歌として取り上げられ、亡くなったときには地元

の新聞に大きく取り上げられたという。

2つの閉塞

河原町のジュリーはさておき、以上の点をまとめると

- 真面目にしっかり働き
- 古い因習を打破し、個人が自立してゆけば

自発的な「契約社会」が生まれ、「自己責任」社会が貫徹されるはずであった。こういった「理想」があったからこそ、さまざまな言論が盛り上がったと言える(たとえば派遣労働の規制緩和には、左翼の系譜に属する学者が大きな役割を果たしている)。ところが困ったことにそう言った状況は実現せず、さらに我々はそんな立派な人間ではなかったのである。欠点もあり、だらしなくもある。若い者には経験的知恵がなく、年寄りには記憶力がない。

そこでどうするか、という問題が生じてきたのが現在であろう。解決策の一つ目は共同体回帰である。老人介護の専門家、三好春樹氏は

特に、これから老人となる人たちほど、老いにつき合うことは難しいのではあるまいか。戦後、自立した個人であることが大切だと教育されてきた世代ほど、自分の“おもらし”とはつき合えないのではないだろうか。老いとは、自立から遠ざかっていく過程だし、個人主義という名の排他主義は介助を受け入れようとはしないだろうから。(三好春樹『老人介護 常識の誤り』新潮文庫)

と述べている。ある種の共同体的雰囲気の中で、互いに助け合って生きてゆかねばならない、とする考え方である。もちろん反対意見は根強い。そうは言っても共同体は息苦しいし、あれこれ他人に介入されるのは困る、という考え方である。

もう一つは政府である。政府が財政支出を社会保障に振り向ける方向が、現状でようやく容認されてきた。しかしながら財政の悪化のもとで、大きくこの方向に頼れないのが実情だ。最後に景気回復・経済成長である。企業中心の福祉か、あるいは就労機会の拡大であるか、の問題も残るが、パイを大きくすると問題解決が容易になることは間違いない。デンマークの社会学者エスピン-アンデルセンは、福祉レジーム論を提唱しているが、大まかに言えば、そのレジームは上記の(家族)共同体・政府・企業の3点を中心に考えるかどうかに対応している。

もちろん日本社会のこれからの考える場合、これらの選択肢のどれか一つだけを選ぶ必要はない。むしろ解答としては、優等生的だが、現状の解決策は少しずつ組み合わせるしかない。その時、重要な注意点は、共同体には市場の風穴を、政府と企業にはほどよい相互関係を、それぞれ構築してゆくということであろう。逆に理想を求め、純粋な議論はかえって危険でさえある。

寅さんからの手紙

本連載は日本社会の特性と呼ばれるものと、近年の行動経済学の接点を探ってきた。連載に当たって明確な計画があったわけではないが、近年の日本社会の閉塞状況は、日本の倫理ならびに社会通念とマクロ経済状況がミスマッチしているからと漠然と考えていたからである。一方で、私たちは成熟社会を気分良く生きる伝統文化を持っていることも事実であって、これらを大切にしたいものだ。行動経済学の大家リチャード・セイラーは「人間だもの」でお馴染みの相田みつをの大ファンだそうで、私自身は「なんで、また」(関西弁で言って頂きたい)と思わないでもないが、勝ち負けにこだわる米国の競争社会

にはないものがあるのだろう。(日経ビジネス インターネット版

<http://business.nikkeibp.co.jp/article/life/20091002/206138/>)

寅さんのセリフで言えば、「それを言っちゃあ、おしまいよ」という露悪的な言論が多すぎるとは、社会は殺伐としてしまう。一方、冷静な議論がなければ、社会は閉塞してしまう。寅さんは妹さくらが喜ぶような「エイイ兄貴になりたくて」奮闘努力をするが、「今日も涙で日が暮れる」理由は、その努力がどこかでちぐはぐであるからだ。古風な精神の持ち主の寅さんは、実は「あるべき姿」の伝統的価値観を観客と共有している。その結果、威張っているようでひがんだり、時として自分の身の上を卑下し、情けないと思っている。この「あるべき姿」と現実の落差があって、初めて喜劇になると言える。しかし日本社会において、もっと大事なことは寅さんを温かく見守る気持ちであり、それがなくなれば喜劇として成立しないだろう。近年はどうも「あんな、はた迷惑な奴はいない」という感情が多すぎたのではないか。(さらに言えばおいちゃんのように、少しは寅さんに説教してもいいんじゃないかな。)

寅さん映画は失恋して旅に出た寅さんから、手紙が届くところで終わる。「思い起こせば恥ずかしき事の数々、今はただひたすら反省の日日を過ごしております」などというものだ。筆者も本連載では、いい加減な思い付きを数々書き連ねたものだ。いまはただ反省していることを表明して、本連載を終わることにしよう。1年間のご愛読ありがとうございました。